

テレビとして考えるのをやめることだ。ビットを基盤に考えることで、テレビは最大の利益を得ることができる。たとえ動画であろうと、データの同報通信（ブロードキャスト）の特別な例にすぎない。ビットはビットなのだ。

六時のニュースをいつでも望みの時間に送り届けられるようになるし、それだけでなくニュースを個々のユーザーに合わせて編集し、ランダムにアクセスできる形で提供することも可能だ。午後八時一七分にハンフリー・ボガートの古い映画を見たら、ツイステッド・ペアを通して電話会社から送って貰えばいい。そしていつの日にか、スタジアムのどの席からでも——何ならボールの視点からでも——野球を観戦できるようになるだろう。デジタルを選ぶことによって生じるこの変化は、現在の二倍の解像度で『セインフェルド〔テレビのコメディ番組〕』を楽しめるという話とはまるで異質なものだ。[ネグロポンテ 1995: 74-75]

#### <参考文献>

- ネグロポンテ、ニコラス 1995『ビーイング・デジタル——ビットの時代』西和彦監訳、福岡洋一訳、アスキー。
- フロリディ、ルチアーノ 2017『第四の革命——情報圏（インフォスフィア）が現実をつくりかえる』春木良且・犬東敦史監訳、先端社会科学技術研究所訳、新曜社。

### ケイト・フォックス著 『イギリスの競馬サークル——人類学者の人間観察』

山本雅男訳 小鳥遊書房刊、2021 年刊  
2800 円＋税、308 頁

国際ファッション専門職大学  
山本雅男

本書は Kate Fox, *The Racing Tribe : Portrait of a British Subculture*, Transaction Publishers, New Jersey, 2009. Originally published by Metro Publishing Ltd., 1999. の全訳である。

訳書には、巻末に「訳者端書」を添えたが、紙幅の関係で、かつ冗長を避けるために言葉足らず多々ありであった。さいわい、このたび絶好の機会を得たので、そのさいの渴を癒したい。

ただし、今回の起稿には二つの目的がある。ひとつは、いうまでもなく、本書そのものの解題。本書の構成や意図について解説を試みるということ。本稿の読者には、社会・文化人類学に関わる方が少なくないだろうから、社会人類学者の人間観察という本書の主旨からして、いくばくかの解説を加える意味でも起稿の意義があろうかと考える。いまひとつは、本書の扱っている対象がイギリス競馬という、なにぶんにも特殊な世界のために、日本の読者には馴染みのないところと思われ、訳出中にも、註解を施したいところが随所にあったのだが、通読の煩雑を慮って最小限にとどめたという経緯がある。したがって、本書の解説をしつつ、扱っている対象そのものについても解析をするという、いわば「メタ理論」的な解題となることをご了解願いたい。

まずその構図を整理しておく、イギリス競馬という特殊な世界があって、それを取り巻く一般のイギリス人（フォックス女史の念頭にある読者）が存在し、さらにそれを読み取る日本の読者（ここで想定する読者）がい

るというトリアーデになっているわけである。どうしても解説が必要となる所以である。それは、ひとえに競馬の世界が、日英いずれにおいてもまことに特殊だということに尽きる。

## 目的

メディア界では、「犬が人を咬んでもニュースにはならないが、人が犬を咬めば大きなネタになる」と、いわれる。つまり、ありきたりのことに人は関心を向けないが、特殊で珍奇なことに好奇心を唆られるという。これはなにもメディア界に限らず、広く社会一般、とりわけ学問研究の場で見られるところ。わけても社会・文化人類学などは、その最右翼に位置するといっても過言ではないだろう。

本書の著者ケイト・フォックスはイギリスの社会人類学者。父君も著名な人類学者ロビン・フォックス (Robin Fox) で、本文にもあるように、幼いころから人類学の薫陶を受けていたようだ。大学はケンブリッジに進み、そこで人類学と哲学を修めた。その後、アフリカなどでフィールドワークを経験し、現在は「社会問題リサーチセンター (Social Issues Research Centre)」の共同ディレクターを務めている。その職務内容は、社会の各所で見られる、いわゆる社会問題、たとえば暴力や薬物、飲酒、各種依存症、携帯やSNSが引き起こすさまざまな問題、さらには非合法行動などのフィールドワークを行い、提言を発信するというものである。ちなみに、イギリスで権威ある脳神経外科医であるヘンリー・マーシュ (Henry Marsh) はご夫君である。

そうした経歴をもつ人類学者がなぜ競馬をリサーチの対象とするようになったのか。

理由のひとつは、洋の東西を問わない、研究費獲得問題にあった。政府からの補助増額が望めないなか、さまざまな組織、団体からの援助を求め奔走した様子が本書 (訳書 14 ページ以下) に述べられている。

そして、あるとき、パブチェーンを全国展

開する大型企業から、パブにおける人間行動の調査に基づく助言の依頼があり、そのプログラム中に競馬場への観戦招待を受けた。じつは、これがフォックス女史にとって初めての競馬場経験だった (つまり、ふだんからの競馬好き、馬券買いではなかったということ)。そこで目の当たりにした人間模様にすっかり魅了された女史は、すかさず当時の統轄機関であるBHB (British Horseracing Board = 英国競馬公社) に、競馬におけるマーケティング戦略という研究企画を捧げあげ、調査研究を提案することになった<sup>1)</sup>。

日本で競馬に関心があるとすれば、それはすなわち馬券を買う、ギャンブル、賭事の対象と、一般には考えられている。ときには有名馬などが現れれば社会現象にもなるが、平時には賭事と離れては見られていない。事情はイギリスも大同小異で、競馬と賭事とは二重写しに見られている。故エリザベス二世女王も所有馬を多数持つなど、熱心な競馬ファンであり、馬券も買われる。これはイギリス人のギャンブル好きを象徴する光景のようにいわれるが、ことはそう単純ではない。

ともかく、フォックス女史の競馬場体験は、人類学者としての学問的好奇心を揺さぶったのである。つまり、ふだん目にしたことのない人びとの姿、行動、習慣に初めて触れたということ。人と犬の譬えのように、人間は珍奇な出来事に出会うと知的興奮を覚え、剩余人類学研究者は、探求心を惹起されたのである。そして、その珍奇さというのは、ひとえに競馬の世界がまことに特異、非日常の異文化、異世界だからにほかならない。

## 書名

ここで、訳者としての解説をしておこう。

本書の原題は、*The Racing Tribe* である。英語で、自動車や自転車、ボートなどのレースは 'motor racing' のように形容語が前置されるので、'racing' は一義的に「競馬」を指す。つぎに 'tribe'。これは「種族」とか「部

族」を意味する。したがって、そのまま日本語に移せば、『競馬部族』という書名になる。だが、それでは日本の読者には想像が付きにくいと考えた。そればかりか、英語圏の読者にも、一瞬、奇異な印象を与えたであろうことは間違いない。

おそらくフォックス女史の狙いも、そこにあったと思われる。書名というのは、購読者に示される第一の情報、キャッチである。ありきたりの言辞では、手に取らずとも内容の概ねが察知されてしまう。まずは、訝しさを与え、手に取り、できるなら購読して判読してもらう、というのが書肆の戦略である。‘tribe’は英語ネイティブにとっても、日常茶飯の語彙ではないのである

もうひとつ、フォックス女史にこの語彙を選ばせた理由。女史の、アフリカなどにおける現地調査の経験が顕われていると見られる。アフリカや南太平洋、アジアの奥地など、いわゆる未開地に暮らす人びとは、それぞれ分離、孤立した固有の集団、部族社会を形成している。人類学者は、そうした孤立集団の独特な風習、宗教、規範などを恰好の調査対象としている。こうした経験から競馬人の世界を見ると、それはまさに‘tribe’以外の何物でもないと感じたに違いない。適切な言葉の選択であったといってよい。換言すれば、それほどに競馬関係者の世界は、世間一般には独特で孤絶しているということになる。

日本の競馬社会に蛸集する人びとは、自分たちのことを「競馬サークル」と呼称する習慣がある。特段の明確な定義や線引きがあるわけではないが、少なくとも競馬で禄を食んでいる人間という枠は意識している。

日本中央競馬会（JRA）の職員に尋ねると、あくまでも慣用語で、職域によるものというあたりが公約数だろうとのこと。日常会話では完全に定着していることは確かだという。したがって、そこには、一般の競馬ファン、来場者は含まれていない。ここが本書で語られている‘tribe’とはまったく異なる。

ということは、競馬界全体を俯瞰する視点、さらにいえば、‘tribe’の外側から観察する立ち位置がフォックス女史の視座ということになろう。また、日本ではサークル内の人間が自覚的にその名辞を使っているのとは対照的である。これは想像だが、イギリスの競馬人は、自分たちをそう表現されて、複雑な思いを抱いたと思われる。違和感、意外感を持ったもの、的を射たと微苦笑するもの、同族意識をいまさらに再認識したもの、そして、好感をもって受け止めたものと。

事程左様に、‘tribe’という語彙の採用は正鵠を得たものだった。関係者自身が自覚していたか否かに関わらず、競馬人の世界が世間一般と別枠にあることは事実。それこそが、訳書の書名に「競馬サークル」と何の躊躇もなく意識した所以である。まったくもって一意対応する語が、すでに存在していたのである。

## 構成

あらためて本書の構成を紹介しておこう。

1. 競馬ファン（Racegoers）
2. 戦士（Warriors）
3. 呪術師（Shamans）
4. 書記役（Scribers）
5. 長老、族長（Elders and Chiefs）
6. 罪食い人（Sin-eaters）
7. 馬主（Owners）
8. 部族（The Clans）
9. アイルランド問題（The Irish Question）

書名に‘tribe’「部族」という名辞を当てた妥当性、的確さについては前項で述べたとおり。実態から見るかぎり絶妙な語彙選択であった。そして、これは「見立て」「比喩」「擬え」という修辞学の技法と指摘することができる。さらにいえば、「～のような」という「直喩法」表現を使っていないので、「換喩」のレトリックといえる。

そのスタンスから、競馬人それぞれもおなじ語法で、つまり、部族社会におけるそれぞれの役割、職分に応じた見立てで表現される

ようになる。とはいえ、部族社会では擬えることができない‘racegoer’とか‘owner’などはそのまま表現されているが、‘racegoer’といえば、排他的の一義に「競馬に行く人」を指しており、本書では「来場者」という意味になる。さまざまな人間の姿が観察されているが、なかには日本ではほとんど見られない人びとがいる。ひとつは「ビジネススーツ組 (Suits)」。文字どおり背広姿の男たちだが、これは競馬場を企業接待の場として使う人びとだ。日本でも「ダービー」など大レースで稀に行われるが、通常はない。ただ、貴賓席や招待席は背広、ネクタイ着用が義務となっているので、例外的には見られる。

さらに、珍しいのは‘Be-seen’と名づけられた人びと。これは、日本ではまったく見られないので、「派手な一族」と苦肉の訳語をあてた。もっとも顕著なのは、毎年6月に「ロイヤル・アスコット」という開催で、ここには特徴的な大型の帽子を被った女性たちが大挙来場する。映画『マイフェアレディー』で描かれ、有名になった。それに近い、華々しく着飾った女性来場者は、少し大きな開催なら地方の競馬場でもよく見かける。

9「アイルランド問題」という表現は、イギリスにとって隣国アイルランドは18世紀以来の悩ましい社会的懸案で、日常によく目にする言葉になっている。ただ、本書では、深刻な政治的意図はまったくなく、むしろユーモラスな意味合いを込めてつけている。イギリス人にとって、アイルランドは笑いや冗談の材料になっているのである。

それ以外の各章は、フォックス女史の見立てがいかに発揮されている。まず「戦士 (Warriors)」。これは騎手について書かれている。危険に向かい身をもって競争に挑もうという比喩である。それだけに仲間意識や連帯感も強いとインタビューを添えて分析されている。

ちなみに本書は全体を通して人間観察と聞き取り調査という現場のフィールドワークか

ら成っている。それだけに、生き生きとした実際の様子が甦ってくる筆致である（文献的な引用や言及はほとんどない。そもそも類書や先行研究がないからだ）。

馬に騎乗するだけでも危険なことなのに、速度を上げ競い合うとなれば、ときに落馬事故などで障害を負うことも、命を落とすことさえ稀ではない。支えているのは鎧だけなのだ。障害騎手ともなれば、なおさらである。この剣呑な仕事で競馬界を最前線で闘っているのだから、まさに「戦士」という見立てに相応しいといえる。

つぎに、「呪術師 (Shamans)」。ここでは調教師のことを子細に観察しており、全体のなかでも白眉の一項となっている。調教師は馬主から所有馬を預託され、訓練を施しレースに出走させる。いうまでもなく、競走馬は「経済動物」、すなわち賞金獲得を目指し、それによって格差がつけられるから、その管理運用も任されている。そして、その間、一朝何事かがあって予後不良となれば、投じられた資金はすべて無に帰してしまう。調教師が口を揃えるのは、管理馬が無事、競走生活を終え、牧場に帰って行くのが理想だと。

日毎、配下の厩務員に預託馬の健康管理や訓練騎乗の指示を事細かく与えるのはもとより、出走時には騎手に馬の調教状態、性癖を伝えるとともに戦術など指示することも。とにかく、調教師の職掌内容は複雑怪奇、世間人の想像を超えている。

ウマは古来より人間に近く手懐けられてきた動物。されど、生き物であることに変わりはない<sup>2)</sup>。つまり、人間の意思どおりに反応するとは限らない、因果の未知数に満ちているわけ。それを何十頭も、ときには何百頭も管理し、望むべき結果を出すというのは、何か呪力のようなものを秘めているのではないかと常人は考える。それが呪術師という想像につながったのだろう。むかしの中国では「伯楽」といわれ、日本のサークルでは唯一「先生」と敬称される所以であろうか（獣医師は



除く)。

競馬の世界は部族社会のように孤絶はしているが、広く世間一般と繋がっている部分がある。なにしろ、一般人には賭事の対象なのだから。それらを繋ぐ役割を担っているのが競馬ジャーナリズムである。これを本書では、「書記役 (Scribers)」と命名している。

典型的な部族社会は、概ね、無文字社会だろうから、「書記」としたのは適訳ではなかったかもしれない。だが、多くの競馬ファンが新聞を手には競馬を楽しむ現状があり、記録、記事、情報に注目しているので、書記役とした。競馬ジャーナリズムとは、新聞、雑誌、TVを媒体とし、たいがいは出走馬の過去の実績情報を集大成している。そのうえで、それぞれの評価、見解を加え、予想を受信者に提供するという仕掛けになっている。

フォックス女史の指摘で興味あるのは、レース後の「集団健忘症」のような現象に着目しているところ。つまり、事前にどのような予想をしても、事後には誰もがすべて忘れたようになる。これは日本でも見られ、予想的中すれば、互いに褒め合うが、外れると誰も非難したり、責任を取ることもない。

調教師や騎手、管理者などは勝因、敗因を反省し、分析するが、よほどのことがない限り、あいまいな結論になる。ちなみに、日本の競馬は「公正確保」が大原則。なにしろ競走の主催者が賭事の主宰者でもあるからだ。だから、レースを振り返ってさまざまな分析をし、唯一の原因となるものを徹底的に排除しようとする。決定的な、それも人為的な原因があったとすれば、不正に繋がり、賭事参加者の不利益となるからだ。すべては偶発的要因とするよう努めるしだい。

「長老、族長」と訳語を与えた原語は 'Elders and Chiefs' である。部族社会は基本的に年功序列を秩序維持の基本とするから、年輩の者が支配者となる。これを競馬の世界に探すとすれば、主催者、管理者ということになる。

競馬は、競馬場を所有、管理、提供し、開催を主催する部分と調教師や騎手、馬主の許認可、諸規則の制定、運用する部分と2つによって構成されている。日本の場合は、これらを一括して組織する「中央」と、前者を各地方自治体が行って、分離している「地方」とがある。

イギリスではほとんどが自主独立で、あえていえば、日本の「地方」の形に似ているが、それもさらに複雑にした構成になっている。日本では、中央、地方あわせて27カ所の競馬場があるが、イギリスでは61カ所。人口が日本の約半数だから圧倒的な数の競馬場が全国に散在している。

フォックス女史の記述は、そうした複雑な機構には及んでいない（おそらく、手に負えなくなる）。各開催時の役員や各種委員の人間観察が中心になっている。なかでも、上位にある役職に 'Steward' というのがあり、もっとも多忙に動き回っている様子が描かれている。そして、この役職が無給であることに驚いている。これは、かつて貴顕人士がメンバーで行われていたころの競馬の、いわば執事の役で、その名残なのである。

最後にいささか不可解な見立てをされた「罪食い人 (Sin-eater)」について。

「罪食い人」とは、中世のイギリスにおいて、死者の供物を食べて、生前の罪一統を祓ってもらう、そのために雇われた人のこと。日本をはじめ東アジアにあった泣男、泣女の風習に似ていようか。

競馬はギャンブル、賭事の対象になっている。だが、競馬単体の存在理由は馬の能力開発、向上を目的とした試行の場なのである。かつては、軍馬や農耕馬の生産が主体であった。ちなみに、日本では農林水産省の生産局が監督官庁なのである。

ようするに、競馬本体にとって賭事は、副次的な添加物にすぎないということ。イギリスでは、たしかに、貴顕人士の楽しみごととして競馬が始まり、当然ながら賭事も個人同

士で行われてきたが、制度的、機構的に競走と賭事は別物と位置づけられてきた。この原則はいまも基本となっている（日本では法律上の特例措置として、この二つが一体に行われているために誤解されているところがある）。

その賭事の部分を担ってきたのが、イギリス独特のブックメーカー（book-maker）という営利私企業なのである<sup>3)</sup>。ブックメーカーには全国展開する大手から、競馬場内に露店を開く零細商店まで数千社ある。繰り返すが、これらは主催組織とはまったく別の存在なのである<sup>4)</sup>。それは、売り上げが主催組織に流れないということを意味する（つまり、主催者の財政はつねに貧困となる）。こうしたことから、ブックメーカーは甘い汁だけを吸い取っていく寄生虫、害虫とされているのだ<sup>5)</sup>。とはいえ、いまでは統轄組織の子会社で‘Tote’という賭事組織が出てきても、圧倒的多数のイギリス人は、このブックメーカーから馬券を購入しているのが現状なのである。

その一方、いかにギャンブル好きといわれるイギリス人といえど、賭事についてはどこか気の咎めるところがあるのも否定できない。全国のかかなり小さな街にもブックメーカーの街頭店を見かけるから、他国と比較して賭け好きであることは明らかだが、その店舗の趣きも、やや後ろめたさが顕われているように見える。もとより、ブックメーカーは強欲、悪徳という社会的イメージ、評価が定着しているのである。

イギリスは精神的に言えば、功利主義の生まれた国であり、他方、ピューリタンの発祥地でもある。競馬場内では、皆々、嬉々として馬券を買ってはいるが、その心底には、やはり道義、良心の呵責や罪悪感を潜ませているのだろう。そして、ブックメーカーがその罪業感の受け皿になっていると、フォックス女史は見立てるわけだ。「罪食い人」とは、まことにもって言い得て妙である。

## おわりに

本書は、イギリス競馬の世界、とりわけその人間行動の側面について、部族社会に擬えながら解き明かした労作である。その意義は二つある。

競馬も、レースは一般によく知られていながら、そこに関わる人びとのことはよく分かっていない。異世界なのである。来場者も、そこに来ることはハレの日の出来事と思っている人が多い。ましてや働く人は世間とは隔絶した職能集団なのだ。だからこそ、女史は「部族」と呼んだのである。その実態を広い世界へと知らしめる意図が明確にあった。巻末では、広報担当になったとはっきり書いている。

いまひとつの意味は、人類学者としての研究の意義。人類学者の研究対象は、アフリカや南太平洋などにある部族社会のように、遠隔の異世界に求めるのが通例だ。それは、つねに外部からの観察、調査になる。たとえ内部の聞き取りを行うにしても、それで内部者になることはない。人類学者と調査対象との距離の取り方は、人類学の方法論においても大きな課題であろう。

フォックス女史も競馬界を前にして、おなじイギリス社会のなかにありながらも、つねに外部者であった。ところが、調査を進めるにしたがい、しだいにその境界を跨ぐようになってゆくを感じていた。内部の側にいる人間も、はじめは余所者扱いをしていたが、彼女の存在を認知しその取り組み、内部への浸潤を容認するようになっていった。そうして得た立ち位置を象徴するように、最終章、結論につけた章題は‘Going native’「サークルの人間になる」であった。

本書は研究対象や分析内容の結果提示であるとともに、研究者自身の変遷過程を述懐する構造にもなっている。ぜひ一度、判読を願うものである。

### ＜註＞

1) イギリスは、世界で行われている競馬の発祥国といわれている。いうまでもなく、馬を競わせて走るという形式は、世界各地で、しかも遠く古代から行われてきた。にもかかわらず、イギリスが発祥国とされる所由は、競馬にかかわる基本的な枠組みや諸々万般を整備したことにある。そして、その原点が1750年頃に設立された「ジョッキー・クラブ (Jockey Club)」にあった。統轄組織である。この間の来歴については、拙著『ダービー卿のイギリス』(PHP 研究所)、1997年、『競馬の文化誌——イギリス近代競馬の成立』(松柏社)、2005年を参照。長年、続いてきた統轄組織の役割は、1993年にBHBに引き継がれ、さらに2007年、BHA (British Horseracing Authority= 英国競馬統轄機構)に移譲され現在に至っている。

2) 競走馬＝サラブレッドは、その名が示すとおり、血の生き物。勝利につながる要素は「血

統7割、調教1割、騎手1割、あとの1割は運」という俗説がある。つまり、良血馬が勝つ確率は高く、勝利度数の多い調教師のところには良血馬が多く集まってくるという現実がある。これは騎手についても当てはまる。

3) ブックメーカー発生の来歴については、前掲『競馬の文化誌』157頁以下参照。

4) 1928年に通称トート (Tote) という別組織ができて、こちらはブックメーカーと異なるシステムで、公式の賭事対応を行っている。ということは売り上げが主催者に還流するということ。トートのオッズシステムについては、前掲書『競馬の文化誌』176頁以下に詳しい。

5) 統轄組織からブックメーカーに対し納付金の増額を再三求めているが、ブックメーカー側は難色を示し続けている。フットボールやテニス、ゴルフなど数多ある賭事対象のなかで、競馬はその一部に過ぎないというのが論拠になっている。